特 71
968

嗣講 赤松圓純師述

新年
説教

天親讃法話

264
635

京都 西村護法館發行

特71
968

新年說教案

嗣講　赤松圓純

天親論主ハ一心ニ無导光ニ歸命ス
本願力ニ乘スレハ報土ニイタルトノヘタマフ

44. 1. 16

今日は、明治四十四年の元日、御互に、古より希なる昇平の時にあひ、明治の聖代に新年を迎へ、畏多くも、天皇陛下の、外護の御恩澤の下に、元日の今日より、如此、法義の物語を致し、二諦相依の宗教を味ひ、現當二世の利益を蒙ることは、實に、喜ばねばならぬことに、本年の如きは、種々目出たきことのあつまりたる年にて、先、國家に取りては、朝鮮合邦の後、初めての新年、實に、朝鮮は古より、吾御國と、深き關係あるにも拘はらず、支那露西亞等が、

常に、窺窬の念をさしはさみてか、種々の口實を攜へ、干渉をこゝろみ、夫が爲に朝鮮政府も、種々に困難を感じ、又、吾が天皇陛下におかせられても、保護の爲に多年深く宸襟を惱まさせられしに、遂に、昨年、合邦の御沙汰となり、彼國の君民も、深く叡慮の辱きを奉體し、彼我、更に一の小波瀾をも起さず、相共に太平を祝し、萬歳を歌ふは、實に目出度こと、扨二には、吾眞宗にありては、五十年に一度の、希なる、宗祖大師の御遠忌、我等、宿因多幸にして南浮人身の針、西土佛教の査の、良縁を得て、別して、今回は、謚號宣下已後、第一回の御法會、夫に付て、つら〳〵、過去七八年前を顧みれば、吾本山は、負債等の種々の事情の爲に、今回の御遠忌は、いかゞ相成ことかと、僧俗一同、心あるものは、非常に憂慮せしことなりしに、當善知識、御就職已來、九夏三伏の炎天、玄冬素

雪の寒夜をも厭はず、遍く、都鄙各地の御門葉を、親く御化導あらせられ、懇に、祖師御相傳の肝要たる、眞俗の教義を御宣布あらせられ、各御連枝方も、極力、贊教の實を擧させられたるに付、人木石にあらざれば、誰か、此盛擧に感じ、德化に歸せざるものあらんや、於爰、兼て示させらるゝ、內心に信心決定、外想に大門工事等の、御待請の準備も、凡そ御見込も立たせられ、已に、昨年十一月二十九日にはいよ〳〵明治四十四年、四月十八日より二十八日まで御遠忌御執行の趣、御發表相成しことは、御門末一同、實に優曇華の花を待得たる心地して、喜ぶべきことこれ偏に、宗祖大師、及び當善知識の、御高德と、各地御門末の、知恩報德の志の厚きとによる、其御遠忌の御正當の日を、指を屈て待うけ奉るの、幸を得たるが、今年の元日である、如此思ひつゞくれば實に王法佛法に付一大

盛事の並現したる新年と、賀し奉るべき今日であります、扨、唯今讃題にそなへたるは、高僧和讃の天親章、十首の中の、第六首の御讃文にして、私、近年續て、新年の演説説教を致すに付て、御經の初の如是我聞、或は和讃の始の、彌陀成佛等の三首、又御文一帖目通初の、うれしさを昔は袖につゝみけり、の御歌等を讃題に致しましたが、今年は、此和讃は、高僧和讃の始でもなく、又天親章の始でもないのに、何故、これを新年説教の讃題に、思ひ付いたぞと申にそこに少し考があります、今及ばずながら、其趣を辯じまするに、我々が、常に聽聞する處の、眞宗の法門は、其本、全く南無阿彌陀佛、の一名號の謂にして、五帖目の御文に、五劫思惟の本願といふも、兆載永劫の修行といふも、たゞわれら一切衆生を、助け玉はんが爲の方便に、阿彌陀如來御身勞ありて、南無阿彌陀佛と云本願を

たてまし〳〵て、乃至、南無阿彌陀佛となりましますとある、爾れば、南無阿彌陀佛といふ本願を立玉ひたは、御自身の爲めではないわれら一切衆生を、助け玉はんが爲とある、それも、一切衆生の爲と聞かば、大勢共有の樣に思ふであらふが、祖師は、五劫の思案も永劫の修行も、ひとへに親鸞一人が爲と、御身ひとりに引請て、御見せ下さる、去ればわれ〳〵も、之を手本にして、本願の尊ときを吾身に引うけ、吾心に頂いて、往生一定の領解にもとづかねばならぬ、其事を御話するに付ては、此一首の御讃文が、甚、便宜と思ふから、暫くこれを讃題として、御話を致します、扨夫に付ては、本年は、亥の年でありますが、もここの十二支の字は、借字にして、亥と云ふが、卽猪のしゝのことであります、此猪の話も種々ありますが、夫れは且く差置で、此猪と云ものは、牛や馬の如き、重荷を

運び、軍用につかひ、耕作の助をすると云ふ働きもなく、經論の上にも羊鹿牛の三車ちやの、又は、虎や馬などのことは、多く出、兎や鼠のことも出たれども、猪のことは甚少ひ、根本說一切有部毘奈耶律の中に、五趣生死輪の畫と云もの丶ことがある、これは、佛が教へて畫かせ玉ひた圖である、其中に猪のことが出てあり、又法華玄義やらに、猪金山に身を摺ると云言あり、(世人多く獅子金山に身を磨すると言ひ傳ふる歟)其他、廣く尋ねたら、猶あるべきかなれども、今、記臆せず、此猪と云ものは、かの淨瑠璃にも、猪頸に着なす鍬形のなど丶ありて、頸の左右に廻らぬものと見にまず、併し動物學では何と云ひますか、もと、くはかたと云が、鍬は借字にて慈菇形と云ふこと、それを加へるの義に取りて、目出度故に用ゐと云へば、猪頸に着ると云も、或は、武士が敵に向ふ時、眞一文字に

進んで、脇目をふらぬ相を、形容するが、かやうに考へるに付て、猪は、勢猛く、一直線に、巖石を踏鳴し、突進する勇氣、實に勇ましきこと、他の獸の、及ばぬ處と思はる丶、今、此猪の、一直線に進む相を想像し、之を應用して、試に、御法義上の、喩に用ひて、見まするに、都て譬喩一分と云て、雪山が象に似たりとは、白き一邊を取るので、雪山に、鼻や、足がありはせぬ、譬を全分に取ると云ことはない、今も此、猪の勇氣あるを、喩に取りてみるに、勸誡二門に喩へらる丶、先、勇氣ありて他をかへりみず、直に進むすがたは、雜行雜修自力のこ丶ろをふりすて丶、更に餘の方へ心をふらず、直に進んで二の足ふまぬは、一心歸命の相に喩ふべく、卽善導は、一心正念にして、直に來れと釋し、又豈去かざるべけんやと勸め玉ひ、或は無疑無慮乘彼願力との玉ひ、一切の異見異學、別解別

行の人等の爲に、動亂破壞せられず、唯是一心に捉りて、正直に進
等とこの玉ひ、決して、自力の策勵を用ふることではなけれども、此
心深信由若金剛は、彌陀他力の賜であるから、行けるか行けぬかと
云如き、疑怯退心は更になく、直に進むが念佛行者の安心なり、若
又之を誡門に取れば、畏多も、吾天皇陛下は、軍人に詔らせられた
る、五ヶ條の勅諭に、軍人の勇氣を示させらるゝところに、武勇に
は、大勇小勇ありて同からず、血氣にはやり、粗暴の、ふるまひな
ごせんは、武勇とは謂ひがたしと、これ例の猪のしゝ武者の、あと
さき見ずと云如きことを、誡め玉ふ聖旨と伺はるゝ、然れば、猪の
如き唯己が意の欲するに任せ、前後左右を顧りみず、傍若無人の振
舞を、得たりとせば、自ら人倫をも破り、交誼にも戻り、甚だしき
は、刑法にも觸るゝに至らば、豈、王法爲本の法義に涵養せらるゝ

念佛行者の相と申さんや、新年の今日より、御互に、十分に慎まね
ばなりませぬ、如此に、猪の勇進するを、喩に取るにも、或る一分
は、勸門に應用して、深信堅固の義を顯はし、又或る一分は、誡門
に應用して、妄作非法の言行を慎むに至らば、此亥の年の猪を緣と
しても、報國盡忠の、一端の參考になりませう。

第二會

天親論主ハ一心ニ無導光ニ歸命ス

本願力ニ乘スレハ報土ニイタルトノヘタマフ

昨日より、御聽聞に及びかけた此一首の御和讃の思召、天親菩薩が
釋迦如來の、三經の御指南により、彌陀の本願を信じ玉ひ、一心の
安心をもて、淨土往生を願はせらるゝ、美酒嘉餚ありと云へども、
飲まざれば醉はず、食はざれば飽かず、綾羅錦繡ありと云へども、

服せざれば暖かならず、いかに彌陀超世の本願、成就し在すとも、行者が之を信ぜねば、苦を脱れて、樂の身となることはならぬ、故に、今、天親菩薩、一心歸命の安心を述べ、往生安樂の本意をとげさせらるゝ、此れを論註には、天親菩薩、自督の詞と釋してある、世尊、われ一心にとは、人ごとにあらず、餘所の話にあらず、この天親、自身に、盡十方無导光如來の、彌陀をたのみて、往生を遂げまするとと示し玉ひ、而も、之を、終りに至りては、普共諸衆生、往生安樂國と、御自身ひとりの、淨土まいりてなく、爲度群生彰一心普く末代の尾嬶まで、淨土參りの道連に誘ひて、自修の已行を以て兼て、化他の要術とし玉へる、自信の上の、教人信の利益までを、述べ玉ひてある、扨爰に一の不審あり、全體、佛教は、諸惡莫作、惡人を常に忌み嫌ひ玉ふ、然るに今、天親菩薩、何そ、自信の上の

教人信に付て、觀經下々品の、惡機までを誘ひ合ひ、手を引き合ふて、往生せんと願ひ玉へるや、菩薩としては、甚、卑屈千萬なる、つまらぬ御方にあらずやと云に、今、謹んで、其趣を御話申さば、此天親菩薩は、三人の御兄弟ありて、長兄を無着と云、其次が天親菩薩、第三を師子覺と云ふた、然るに兄無着は、初に小乘教を學ばせられたる處、御意に滿足し玉はぬに付て、後に大乘を學び、兜率天に在す處の、彌勒菩薩にあひて、法を傳へて、大乘大菩薩とならせられた、扨佛教に大乘小乘と云ふは、近く云へば、學校に、豫科と正科との分れたる如くで、佛法中に於て、小乘は、何ごとも小振に說て、つまり、他人のことまでは手が及ばず、自身一人が悟る羅漢の法なり、云はゞ已人的の法なり、又大乘は廣く自利々他して我身が悟るばかりでなく、廣く、他の一切衆生をも、濟度せんと、大

願大行を發して、成佛する法なり、然に天親菩薩は深く其小乘法を學んで、五百部までも論を造らせられ、大乘の法をば、常に謗らせらるゝ、或時、兄無着菩薩より、急に御大病とて、御使が來た、天親菩薩打驚き、御使と一所に、兄上の處へ御出になり、御病氣の樣子を、御尋なされた、其時、無着菩薩の御答に、僕は、心に重き病を發して、苦しみ惱む、それも、其方故のことであるとの御話、天親菩薩、不審に思召、それは、また、何なる譯で、私のことが、御心にかなはずして、御病氣の本となりましたそと問はせられた、無着菩薩の御答に、其許は深く小乘教を信じて、大乘甚深の法をしらず、常に大乘の法を謗る、其罪によりて、未來は必惡道に沈まねばならぬ、其事を氣の毒に思ふて、病となりたと仰せらるゝ、其時、天親菩薩あやまりはてゝ、夫より心を翻へし、無着菩薩の指南によ

り、深く大乘を學び玉ひ、其後、自ら思召すには、我れ昔加樣な尊とき大乘法をしらず、小乘の局見より、種々に大乘を謗り毀ちたることのあさましや、この惡業を懺悔の爲に、この大乘を謗りたる舌を、喰ひ切りて謝罪を致しませうと、仰せられた、其時、兄の御諭しに、たとひ其方、千枚の舌を喰ひ割きたればとて、大乘誹謗の罪は滅せず、寧、それよりは、眞懺悔の心があらば、今日已後、其謗りた舌を以て、廣く大乘の法を讃嘆し、弘通せよと仰られた、其後天親菩薩大乘の論を、五百部まで作らせられた、初の小乘の論五百部と、合せて、千部の論主と貴ぶか、この天親菩薩、又自力修行の階級を云へば、五十二段の中、第四十段の、十廻向滿位の菩薩にして、位居二明得一道隣一極喜一と、讃め奉る菩薩なり、扨此小乘教よりは、大乘教のすぐれたことは、前にも云如く、小乘は、自身は悟れ

ども他を濟度する力なし、故に大菩薩方は、たとひ地獄には墮つるとも、小乘の羅漢には、なるなとの玉ふ、元來、佛法の本意は、苦の衆生を助くるにあり、故に菩薩方は、己れのことをあとにまわして、先づ衆生を救はんと願ひ玉ふ、其御目から御覽になると、我身ひとり悟ると云、小乘の羅漢をば、深く御きらひなさるゝ、然るにわれ〳〵は、三惡道の苦しみを、身に受る、實の苦しみを知らぬから、羅漢の事を聞くと、それは菩薩よりは、薄情なゞゝ思へども、實に、苦を受ることを思ふて見れば、他人のことまでは手が屆かぬ先、我身が助りたいと思召すに、無理はなひ、爰で、いよ〳〵佛や菩薩の、我身を後にして、先、衆生を助けたひと思召す、御慈悲の廣大なことを、味はゝねばならぬ、雜譬喩經に、昔、雀離寺と云寺に、一人の老僧あり、小乘の羅漢である、この羅漢の老僧、或時、一人の小僧をつれて、道を行く、法衣、其他のものを持たせて、老僧のあとにしてつれてゆく、其時、小僧が、老僧につれられて、行きながら、此世の無常を思ひ、未來は、迷を離れたいと思ひ立ち夫に付ては、菩薩の道を修行して、自も悟り、人をも助けたいと思ふ心を發した、其時、老僧、俄に後を振り向ひて、小僧を前に立て、小僧の荷物を取りて自身に持て、小僧のあとから、ついて行く、然るに小僧、又心に思ふには併し、とても菩薩の行は容易でない夫よりも、この老僧の如く、羅漢になりて、先自身だけ、助からうと思ふと、忽又荷物を小僧にわたし、老僧前になりてゆく如此小僧の、或は菩薩にならうと思ひ、或は羅漢で置うと思ふ、其心のかはる度毎に、あとにしたり、さきにしたりすること、三回に及んだ、其時小僧が老僧に問ふて、あなたは、何をなさる私をあとにしたり、さ

きにしたり、荷を持ちたり、持たせたり、私をば弄になさるかと云ふた、其時、老僧答へて、汝、先刻より、一たびは、菩薩にならんと云心を起し、又は、いや〳〵、こても六かしいからと、退墮心をおこす、其菩薩心を發した時は、この老僧は羅漢なり、其方は菩薩なり、菩薩を、あこにはせられぬ故に、前にたてた、然るに、其方の心が、いや〳〵、こても、菩薩にはなられぬ、羅漢でおかうと思へば、其時は小乘の羅漢の根性ちやで、此方の弟子ゐへ、あこにして、荷を持たせる、其方の心が、三進三退した故に、其度毎に、あこにしたり、又さきに立たり、一定せぬのちやと、答へられたとあり（五字藏經の本には菩薩心〳〵とあり薩は或は提の誤歟檗本等撿すべし、爾れば大乘と小乘と、勝劣あることは明なり、然るに、若爾らば、大菩薩心を發して他の衆生までも助くるは、貴べきなれど

も、今天親菩薩は、たゞ一心に彌陀をたのむと、我等凡夫同樣なる信心一つで往生なさるゝ位なことは、別に貴くも、難有も、思はれぬにあらずやと申に、爰が、喜ぶべきことで、なるほど、大乘の菩提心を發して、自利々他滿足するは、貴きことなれど、自力聖道の菩提心、こゝろもことばも及ばれず、常沒流轉の凡愚はいかでか發起せしむべき、こても、我々では、其自力の菩提心は發されぬから一心歸命の安心を勸め玉ふ、然るにこの、一心歸命は、菩提心と、別なものとは、必思はるゝなかの、心も言も及ばれぬ、自力聖道の菩提心に對する淨土の大菩提心である、和讃に、盡十方の無导光佛、一心に歸命するをこそと、一心歸命の安心を出して置て次に天親菩薩のみことには、願作佛心とのべ玉へと云より已下、段々に、一心の異名を出して、信心すなはち一心なり一心すなはち金剛心金

剛心は菩提心とある、爾れば、一心の信心は、取りも直さず、他力の大菩提心ちやと知せ玉ふ、この大菩提心は、佛になるべき因也へに、この一心を得た行者、願土に至ればすみやかに、無上涅槃の佛となり、大阿羅漢の聖者さへ、他人を助けるこゝはかなはぬとあるのに、すなはち大悲をおこすなりと、還相廻向の利益を得て、生々世々の親子兄弟、いかなる惡趣にあらふとも、自由自在に濟度する仕合を頂くが念佛行者なれば、命あらん限りは、廣大の御恩報謝の稱名に、懈怠のなきやう。

第三會

天親論主ハ一心ニ無導光ニ歸命ス

本願力ニ乘スレハ報土ニイタルトノヘタマフ

一昨日より御話に及ぶ、此一首の思召、一心に無導光に歸命すとあ

る、この一心歸命と申すことは、もと第十八願には、至心信樂欲生の三信を以て、眞實報土の正因とし玉ふ、然るに、その本願の謂を聞て、領解し玉へる、天親菩薩の御言には、一心歸命と仰せられたこれ本願には三信とあるを、論主は一心と述玉ふは三と一と、忽に相違してあり、如何と申すに、これは吾祖信卷に、愚鈍の衆生、解了し易から令んが爲の故に、三を合して、一とし玉ふ歟と答へて、其三が一になる謂を成するに付て、二番の問答を立て、つまり、三信を約むれば、疑なく信する、他力の一心となるそと、御決擇あらせられた、扨、この一心と云ふ御言、阿彌陀經に、一心不亂とあれども、すゝて觀經や阿彌陀經は、定散自力の人を、導かせ玉ふ處あるが故に、阿彌陀經の上へでは、一心とあるのも、自力の一心と、他力の一心とに通して、其中、他力の一心とすれば、今の、天親菩

薩の御領解の一心と、全く同じけれども、若自力の一心とする邊では、今の論主の一心とは、決して同じからず、然らば、天親菩薩、三經によりて、彌陀の本願を信じ玉ふとすれば、この一心は、何れに依り玉ふやと伺ふに、これは、大經成就の文の、乃至一念の、一念のことを、一心と仰せられたので、其ことは、信卷に、一念とは信心二心なきが故に、一念と云、是を一心と名くと、成就の文の一念を釋して、信心二心なきことゝ、これを一心と名くとは、誰が名け玉ひたぞ、紛れもなき、今の天親菩薩の、一心歸命の御言である、又大經の三輩章には、一向專念無量壽佛とあり、又、論註の三不三信の御釋にも、淳心一心相續心とある、これらの、一心も、一向も、皆、今の論主の一心と同じことなり、又善導の玄義分の初十四行偈に、世尊我一心、歸命盡十方、法性眞如海とある、この一心

これはもと、觀經を釋する、四帖の疏の、初の御言故に、一往は、自力の一心にも通じ、又尅實すれば、他力の一心にもなるなり、然るに、如此申したばかりでは、漠然として、一向、要領を得がたきに似たり、先三信が一心になることをば、近く譬て云はゞ、凡、眼前に遮るもの、石であれ、木であれ、すべて、大小にかゝはらず、八事俱生隨一不滅と云て、八事とは、地水火風と、色香味觸との八である、(聲は除く) 若し一の物があれば、必此八事を具せぬはない然るに、燃て立つ火には、水は具せず、流るゝ水には、火は具せずと思ふなれど、今、八事俱生の時の、地水火風と云ふは、能造の四大とて、燃ゆる火も、流るゝ水も、みな其四大に造られて居る、所造の物柄にて、流るゝ水にも、燃ゆる火にも、各、四大を具する、又、其物には、色香味觸とて、物あれば、青黃等の色があり、又多

少の香あり、若し口に入れたら、必ず甘酢等の味あり、手足等に觸るれば、滑い澁等の觸境があると倶舍などには云ふてある、爾れば一心が三信と云ふ位でなく一物體が八事によりて倶生してある、猶それより近く云はゞ、今日は、能く働いた、さあ、之をやると、五拾錢の銀貨を、一つ遣りた、一つ貰ふたと云、爾るに其銀貨の一に三の謂がある、先ず銀貨は、白きかねとし云へば、金貨の黃でもなく、銅貨の赤でもなきことを示す、又圓きかねなりと云へば、壹分銀等の、長方形、小判等の隋圓形でなきことがしられ、又重量あるかねと云へば、紙幣の、輕に對して簡る〳〵、如此、金銅貨に簡ひ、壹分銀等にゑらび、紙幣に簡ふ銀貨に此三の謂を具足して居れども遣る人も、取る人も、銀貨を、三つ貰ふたとは云はぬ、一つ貰ふたと云、是、三の謂れが、一の銀貨に、具して居る、今も其如く、第

十八願の三信は、三信別々に、三あるにあらず、凡夫の不實に對する時は、彌陀の至心の御まことと、凡夫の疑に對しては彌陀が凡夫を助くることに、二の足ふみ王はぬ、疑なき信樂、凡夫の、淨土參りをいそがぬ心に對しては、彌陀の、欲生我國の大悲心、これを約むれば、欲生は信樂に攝まり、信樂は至心に攝まり、至心は至德の尊號たる、唯一の、南無阿彌陀佛より外なし、此南無阿彌陀佛の謂を一口にいへば、たのむものを、必助くるの、御呼聲の外なし、此喚聲の聞ひたるが、彌陀のまことの屆きたる處、我をたのめ、必助くるとあるからは、かゝる時は、いよ〳〵、阿彌陀佛をふかくたのみまいらせて、極樂に往生すべしと思ひとりてとある、行けるか、行けぬかの、二の足をふまず、極樂に往生すべしと思ふことは、少しも疑なき信心、これを、今は、一心と仰せらるゝ、この一心の中には

自ら、三信はこもることい前に出たる、銀貨の喩にて可レ知、彌陀をたのみて、極樂に往生すべしと、決定の心になりしは、必助くるの彌陀のまことの、其まゝ屆きたるなり、爰に於て、疑ふ心の少しもなきは、永劫の間に、一念一刹那も、これで衆生が助けらるゝかゝ助けられまいかと、二の足をふみ玉はぬ心が、衆生にあらはれて、つゆほども疑はぬ、信樂がおこる、又、未來ときけば、案じられた心底に、今は、我國に來れと呼かけ玉ふ、大悲心が、行き屆きて下されたれば、唯まいりたひてはない、參らせて下さるゝことを、一定した欲生我國なり、つゆけるかゝ行けぬかではない、此心深信由若金剛とあるが、其事なり、扨この一心の御言を、論註に、言念無碍光如來願生安樂心心相續無他想間雜と御釋なされて、言念無碍光如來願生安樂とは、一心を無二の義で釋し玉ふので一心とは彌

陀一佛をたのみて、御文に、一心一向といふは、阿彌陀佛において二佛をならべぬ意、三世十方に、佛はかず〳〵在せども、私を助け玉ふは、彌陀一佛、たのむべきは阿彌陀如來なりと、左ながら忠臣の二君につかへず、貞女の両夫を並べぬ味なり、次に、心々相續無他想間雜とは、一心專一の義にして、餘善餘行に心をかけず、雜行雜修自力のこゝろをまじへず、ひたすら、彌陀の願力一を信じて、憶念相續する、これが一心の相なりと顯し給ふ、然るに、一心は、三信をつゝめたる一の心、歸命と云ふは、たのむことゝ二ありやと云に、不爾、一心は、彌陀一佛となり、餘善他佛に、心のかゝらぬなり、其心は、いかゞして發りたるなれば、全く、大悲の手强さが聞にて、後生の一大事は、この彌陀に、助けられ奉ることそこ、なりたるが處、卽歸命のたのみこゝろ故に、一心と歸命と、別々にあ

らず、御文に、一心にたのみ、一向にたのむこの玉ひ、又は、歸命の一心とも仰せらるゝ、昔支那の、孟光と云人の妻の、梁鴻と云女は夫を敬ひたる人にて、夫に膳を供へるに、齊眉の禮とて、眉のあたりまで、高く擧て、持ちて出る、所謂、目八分に上ることで、ありませう、これ目八分と、膳をあげると、二つありはせぬ膳を高く擧げた形が、目八分なり、又目八分は、外のことではない、膳を擧げたすがたを云なり、今も、一心一向にたのむ、又歸命の一心と、たのむすがたが、二心なき一心なり、其一心のすがたが、ふかく彌陀をたのむ心なり、よく〳〵味ひ玉ふべし、次に本願力に乘すれば、爰に、本願に、力の字をそへ玉ひたは、難有ことにて、論註の御釋に、願不徒然、力不虛設とありて、何ほど、難有本願を御立て下されても、其本願が、成就し玉はねば、我々の往生はかなはぬ

然るに、今は、四十八願ことゝく成就して、むだ約束でなく、虛約束でなく、たのむものを助けるの、本願の御約束の通りにいたゞいて、其本願を信ずるものは、十人は十人、百人は百人、本願力に乘ずれば、報土にいたると、決して、往生に、仕損じはないぞよと御示下さる、爰をば、幾重にも味ふてみられよ、こんな心、こんな機さまで、我心のみに目をかけるが、我々の自力執心なれど、今は夫れに、及ばぬことで、若非佛力四十八願便是徒設と、佛の本願で助かり兼て、衆生か力を張りこむならば、四十八願は、むだ約束と云はねばならぬ、萬々、左樣な道理はないから、行者の自力に目をかけず、ひたすら、本願を信じて、淨土に參れと、勸め玉ふそこを、今本願力に乘ずれば、報土にいたるとのべたまふと、御化導下さるゝのでありまず、猶此和讃に付ては、種々要義あり、御話

264
635

新年說教案

嗣講　赤松圓純著

致したく存じますれども、長座になりますから、先これにて、新年說教の筵をまきます、實に、新年元日より、今日まで三日間長閑に法義の御話を致し、現當二世の利益をいたゞくも、全く、王法外護の御恩なれば、謹んで、天皇陛下の萬歲を祝し奉り、ことに、教育勅語、戊申詔書等の、御趣意を奉戴し、大切に各自の本分を盡す樣新年の始より、心かけたきことであります。

明治四十三年十二月三十日印刷
同四十四年閏一月廿三日發行

京都市下京區下珠數屋町東洞院西入
櫛町八番戸
發行兼印刷者　西村九郎右衛門

著述者　赤松圓純

特71
968

嗣講 赤松圓純師述

新年説教 天親讃法話

京都 西村護法館發行

264
635

301511-001-2

特71-968

新年説教案

赤松 圓純／著

M44.1

AAE-0001